

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第15号
2018(平成30)年3月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

糸紡ぎ三年 — 和綿と洋綿、どちらが紡ぎやすいか —

和綿(アジア綿)と洋綿(アメリカ綿)では、どちらの方が「糸」に適しているかと言えば答えは明白です。洋綿です。これは前号で紹介したH. A. M. A. 木綿庵産の綿の品質検査結果からも明らかです。紡績性指数(SCI)は、和綿が72であるのに対して洋綿は181です。繊維長(Len)は、和綿0.942に対して洋綿1.228。織度/太さ(Mic)は和綿6.64に対して洋綿3.92。

すなわち、洋綿の方が1本1本の繊維が長くて、細いということです。綿糸というのは綿の繊維に撚りをかけて繫いで(紡いで)いるだけですから、長くて細い繊維の方が絡みやすく、しかも細くて丈夫な(切れにくい)良質の糸を作り出すことができるのは当然です。紡績性に優れているというのはそういう意味です。

ところが、私が不思議に思うのは、実際に糸車で糸を紡いでいると、洋綿よりも和綿の方が紡ぎやすいということです。このことはちょうど一年前の本紙にも書いています。和綿から洋綿に打ち綿を替えたのは平成29年2月25日でした。そのときに、「和綿の手紡ぎに慣れた手で、洋綿を紡ぐと、とても紡ぎにくいのです」(第3号裏面参照)と書いています。今回、丹羽正行さんに打っていただいた和綿が届いたこともあり、平成30年2月26日より、一年ぶりに洋綿から和綿に切り替えましたが、やはり圧倒的に和綿の方が紡ぎやすいのです。このことは、「慣れ」の問題では無く、綿そのものの質によるものと思えません。そこで気づいたのは、機械紡績に向いているということと、手紡ぎに向いている、ということとは別ではないか、ということです。

「和綿と洋綿では、どちらの方が紡ぎやすいですか？」という質問に、「洋綿です」と答えている場面をよく見たり、聞いたりします。私もこれまではそのように信じていました。ところが、最近になってそれは、思い込みに基づく誤った情報ではないかと反省するようになりました。

「紡績性に優れている」→「糸に適している」→「紡ぎやすい」。間違いではないかもしれませんが。「紡ぎやすさ」はあくまで感覚的なものですから、個人差があって当然です。洋綿の方が紡ぎやすいと感じる方のほうが多いかもしれません。ただ、少なくとも私は、現時点での私は、糸車で和綿の方が紡ぎやすい、と感じています。

「糸紡ぎ三年」という言葉を聞いたことがあります。人並みに糸を紡ぐことができるようになるには最低でも3年はかかる、という意味です。そういう意味では、私はまだようやく2年目に入ったところです。まだまだ初心者。1本1本の繊維が短い和綿の方が、手先のコントロールがききやすく、糸に負けない、というだけのこともかもしれません。いずれ長い繊維でも自在に操ることのできる熟練の技を身につけることができれば、「洋綿の方が楽しい」と思えるようになるのかもしれませんが。あるいは、「じんき」(しの、よりこ、とも呼ぶ)の作り方や打ち綿の繊維の方向が関係しているのでしょうか。まだまだ、わからないことだらけです。

写真は糊付けした総糸 →



----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成30年2月26日～平成30年3月25日)

岩手県1、山形県1、千葉県2、東京都2、三重県1、岡山県1、大分県2

【H.A.M.A.木綿庵】(平成30年2月26日～平成30年3月25日)

メールを含む各種相談件数9、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数2件2名



〈手紡ぎ糸に糊付けを施す〉平成30年3月11日

平成30年3月11日、洋綿の手紡ぎ糸に糊付けを施しました。経糸に用いるためです。糊付け用の糊にはショウフノリ(生麩糊:小麦粉から抽出したデンプン)とフノリ(布海苔:紅藻綱フノリ科フノリ属の海藻の総称)があり、初心者にはショウフの方が扱いやすいだろうとのアドバイスをいただいて、ショウフで行うことにしました。用いる量は糸の重さの約10%。

まず粉状のショウフに少量のオリーブ油を垂らして、しっかりと練り込みます(オリーブ油は入れなくても良いそうですが、入れると滑らかになるそうです)。水で溶かしてから、80℃の熱湯を加えます。総糸を漬け込み、揉み込みと絞りを繰り返し、その後約15分ほど浸け置きしてから、よく絞って水気を取り、はたきます。総糸の輪の中に両手を入れて、しっかり何度もはたきます。その後、竿にかけて捌き、天日にあてて乾燥させます。作業は冬期の湿度の低い晴天の日が最適との由。



〈草木染め — イチイ、桜のひこばえ —〉平成30年3月24日

平成30年3月24日、イチイ(別名アララギ)と、桜のひこばえの小枝を用いて、草木染めを行いました。前処理は豆乳:水を1:2の割合で希釈。イチイを選んだのは、赤色を染めることができると知ったからです。840gのイチイの小枝と葉を250のお湯で約1時間煮沸。藁灰(アルカリ)で後媒染。藁灰の上澄み液に約10分浸けたハンカチと、約5時間浸け置きした和綿の手紡ぎ糸とでは、明らかに色の入り方が異なりました。ハンカチは淡いクリーム色がついた程度でしたが、糸にはほんのりと淡い赤味ががりました。本来であれば、イチイの草木染めには赤味を帯びた芯材を用いることを後で知りました。ちなみに、イチイの名の由来は、その芯材で笏板が作られるからで、官位を表す正一位に因むものだそうです。なお、桜のひこばえの小枝を用いた草木染めは失敗に終わりました。

【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿)

2月26日～3月25日(作業実日数20日) 糸の総量135.2g (36.05匁) 総時間234分(3時間54分)

※1分間≒0.578g 1時間≒34.7g (9.3匁)

※平成30年2月25日より、丹羽さんに綿打ちしいただいた和綿(平成28年, 2016)を紡いでいる。

【研修等の記録】

- ・平成30年3月04日 「相楽木綿伝承館」(京都府相楽郡精華町)を訪問、糸の糊付けについて質問
- ・平成30年3月11日 けいはんな記念公園観月楼「第9回相楽木綿作品展」準備の様子を見学
- ・平成30年3月21日 ふれ藍工房「綿元(わたげん)」(大和郡山市北郡山町)を訪問、見学
- ・平成30年3月25日 「春の町家の雛巡り」寺田家住宅茶室(大阪府貝塚市)にて茶会亭主を務める

【以下の写真は、左:イチイの小枝、中:イチイから採った染液、右:ふれ藍工房「綿元」の店内の様子】

